

雲くも

大窪詩仏おほくぼしぶつ

霧きり似に煙けむり下した似に還また雨あめに似にちる

霏ひ霏ひ漠ばく漠ばく更さらにに紛ふん紛ふん

須臾しゆゆにして風かぜ起おここつて吹ふき將もち去さり

去さつて前山ぜんざん一帯いつたいの雲くもと作なる

【作者】大窪詩物(一七六七〜一八三七年)(明和四年〜天保八年)徳川中期の漢詩人。常陸(ひたち 茨城県)多賀郡大久保村に生まれる。通称柳太郎、名は行光(ゆきみつ)、字は天民、詩佛はその号、また瘦梅(そうばい)、詩聖堂の別号あり。江戸に移り住み、諸州に遊び京師の頼山陽をも訪ねた。草書と詩を以て名高く、市河寛齋(かんさい)、柏木如亭(じよてい)、菊池五山(ござん)と共に江戸の四詩家と称せられる。習性酒脱、谷文晁(ぶんちやう)と親交あり、好んで墨竹を画(えが)き甚だ気韻に富む。天保八年二月に没す。年七十一歳。相州(神奈川県)藤沢に葬る。著書に詩聖堂詩集、その他多数の詩集がある。

【語釈】*霏 霏…雪 雨などがしきりに降るさま。 *漠 漠…ぼんやりとしてとりとめのないさま。 *紛 紛…入りまじつてみだれるさま。
*須 臾…しばらく。

【通釈】霧に似て霧にあらず、煙に似て煙にあらず、また雨に似て雨にあらず。霏霏と降りしいていいると思えば、漠漠と散りしき、また紛紛と乱れ散る。しばしの後、一陣の風が吹きおこつて、これを持ち去つて行き、前山をつつみこんでしまふ一群の雲になつてしまった。

【備考】この詩は、雲を詠じた詠物詩である。奇想また雲の如しというべし。

